



大きくなって帰ってきてね、子どもたちによる鮎の放流

道志川とのふれあいと 交流の機会、あゆまつり

事例の概要

道志川は昭和30年代までは急流として知られ、その昔天然の鮎は鼻曲がり鮎として徳川将軍家に献上されていた歴史もあります。「中道志川あゆまつり」は平成8年から毎年7月に、「鼻曲がり鮎の里」として知られる中道志川流域で行われています。水源の清流を守る中道志川トラスト協会、宮下自治会を始めとした青野原地区の自治会と、流域住民が主体となり、多くの人々に道志川とのふれあいと交流の機会を持ってもらうために行われる催しです。川に親しむプログラムのほか、小学生の器楽や勇壮な太鼓も響き渡ります。また、青野原地区の各自治会が主体となってつくる、絶品の鮎の塩焼き、鮎めし、焼きそばも味わうことができます。



子どもたちもお手伝い

特徴・ポイント

道志川を持つ豊かな自然環境にふれあうことを目的とした、「鮎釣り大会」、「鮎の放流」、「親子・川の自然観察会」をはじめ、「郷土料理の食体験」を通じて、水源地域の貴重な自然や、魅力ある伝統文化を一人ひとりが共有し、次世代に継承していくことを目的に、「鮎の塩焼き」、「鮎めし」、「鮎の塩焼き体験」などの食体験もできます。さらに中道志川トラスト協会による「美化活動の紹介パネル展示」や特設ステージにおいては、地元青野原小学校生徒による器楽演奏、八王子「小鉄太鼓」による和太鼓演奏などが、



すぐ売れてしまう鮎の塩焼

課題・展望

祭りを盛り上げていました。「鮎の放流」では、子供たちがバケツに入れた鮎の稚魚を、「大きくなってね」と声をかけながら、丁寧に放流していただきました。このような活動をとおして、子供達ばかりでなく大人である我々も、今一度、水の恵みをいただいていることを再認識する機会となります。水に親しみ、川を大切に思う心がはぐくまれ、その結果地域を守る気持ちが芽生えるのだと感じました。

に来てくれていました。あゆまつりの原動力になっているのは、青野原地区の自治会と中道志川トラスト協会ですが、地域全体が一体となつて、あゆまつりを盛り上げていたのが印象的でした。

青野原地区（地域）の問題として、多くの家庭で子供が成人し、家を離れ、自治会員が高齢化してきていることが挙げられます。宮下自治会は例年あゆまつりへの参加者が少なく、自治会のテントをたてるのも非常に大変になってきています。こうした中、焼きそばの販売等を地元の小中学生が手伝い

体験・取材した職員から一言！！



子供たちが楽しそうに鮎を放流する様子を見て、こういった経験が、自然と生き物に対する想像力が生まれ、豊かな環境づくりにつながっていくのだなあと感じました。(情報システム課 齋藤)



あゆまつりの伝統を守り、子供たちに身近な水や緑・歴史を大切にしたい気持ちを学んでもらい、大人になりふるさとに帰ってくる、といった良い循環が生まれれば良いなあと願っています。(予防課 中村)



鮎の塩焼きや焼きそばを焼いていた自治会の方々も、汗だくになりながらも楽しそうに焼いていたのが印象に残っています。また、普段川で遊ぶ機会の少ない子ども達にとって良い体験になったのでは、と思います。(下水道管理課 長澤)

団体の基礎DATA



団体名◇
宮下自治会(青野原自治会連絡協議会)
発足◇
昭和37年
(津久井町部落連絡協議会発足年)
世帯数◇45世帯
代表者名◇尾崎 等さん

